

農民の発禁詩集

農民詩集の発禁

プロレタリア詩の時代には、地方の農民のなかにも反抗的な詩人が輩出し、詩集発禁のことも幾たびあった。すでに紹介した伊藤和の『泥』などのことは、数年前に彼の全詩集が出たりして割合に知られているが、他にも語っておかなければならないものが幾冊がある。

伊藤和もそうであったが、その人々の多くは、各地域での活動的存在であり、またどこかでアナキズム系の活動とつながるところもあった。そのなかで今私にわかっているものとして次のような詩集がある。

瘦土に燃ゆる	大杉 幸吉	昭和八年	(岐阜県)
廃園の血脈	定村比呂志	昭和十年	(福岡県)
野良着	加藤 吉治	昭和八年	(山形県)

このうち『野良着』はガリ版詩集である。少数数の手刷り手製のそれが禁止、押収ということになって、今では、ほとんど入手しがたい。さきの日本読書新聞の連載「発禁詩集」の最終回として次のようにかかれていた。

『棘のある巢』『野良の昼食』等の詩集が出たのは、アナキズム系の解放文化連盟が昭和八年に出発して各地農村の詩人等が参加したときで『野良の昼食』の犬養智は機関紙『文学通信』に評論「吾等の陣営と民謡」をかいている。その要旨は「卑俗だ低劣だという理由で民謡が等閑視されるのは、芸術大衆化とかその社会的浸潤を考えたとき、われわれ（アナキスト）の活動としてマイナスである。吾々の正しい内部生命の欲求する真の民謡を、どんどん歌い出さねばならぬ」というものであった。

当時自由連合主義の農村における潜在的な浸潤のこともおもえば、細川、犬養、^(注)国井らの詩集（それらは農民詩集として、少数数ガリ版で出され、「治安」に害ありとして禁止された）が、ここに一并びの農民詩集が禁止の行列となっていることは、偉観でさえあったのである。（注・国井重二の発禁詩集『蛙の学校』は農民童謡集という珍しいものであった。）

しかし、アナキズム系のこれらの農村詩集の作者たちの思いが、「民謡という大衆に受け入れられやすい形式で、何かを伝え何かを語ろう」とするものであったことを、文学の問題

としては、宣伝扇動を目的のプロレタリア文学運動が犯した誤りの二の舞だというのはまら
がっていよう。民謡が発生する地盤には、農民の下からの、噴きあげられるべき不満が、そ
の生活の年輪のように潜在していたのである。

ともに歌い、ともに踊る、つまり生活の不満のはげ口に、何かを装填するような思いで、
その当時の日本農民のある者は、仲間の自覚を要求しつつ、ものを書くことをもう一つの自
己激励として民謡づくりにいそしんだのであった。それはけっして単純な宣伝文学などでは
なかったのである。だから千葉、山形、秋田、静岡、群馬、茨城、埼玉、岡山、愛媛、福岡、
大分、鹿児島各県下に、農民の詩と民謡のこえがあげられたのである。

その事實は、すでに遠くへ去り、ほとんど現在から忘れられようとしているが、もしここ
にその名を記しながらも未だ紹介することできない下記の『発禁詩集』たちが、隠棲のど
こからか出て来てくれたら、三十数年前の、農村詩人たちの発声を省みることもできるだろ
う。(注・「細川基・棘のある菓」「犬養智・野良の昼飯」「国井重二・蛙の学校」等)

その詩集を一度は手にしたことのある者としてこれらのことに遠い記憶が残っており、それ
を一括してここに紹介しておきたい。一括するといってもそれは軽んずる意味ではなく、ほぼ
同じ時期に、農民の詩集がそれぞれの形でこのように出現し、そして禁止されたその事實を改
めて考え直したいという思いからである。

これらの農民詩集の時期は、昭和十年以前の、プロレタリア詩の活動期とほぼかさなり、昭
和の文学弾圧史に記録さるべきものである。

それは、大正末から昭和はじめの農村自治連盟などの活動に刺激され、他方ようやく分裂か
ら連合へと整備されたアナキストの文化活動につながるころがあった。当然、そこには農本
主義的な傾向があり、むしろそれに支えられ、強味も弱点も同時に存在した。しかし第二次世
界大戦に入る以前の日本の詩の状況として忘却しがたく、その証拠のように、いくつかの発禁
詩集があったのである。

大杉幸吉『瘦土に燃ゆる』

昭和八年から十年にかけて活動したアナキスト系の、全国的な文化運動の組織「解放文化連
盟」は、その中心に詩人が多く、その出発のときには萩原恭次郎、草野心平、伊藤和、碧静江、
金井新作、植村謙、岡本潤、小野十三郎、局清、土屋公平らが数えられた。

そして『罰当りは生きてゐる』(岡本潤)、『古き世界の上に』(小野十三郎)、『瘦土に燃ゆ
る』(大杉幸吉)らの詩集が刊行され、この他に同連盟傘下の詩誌『詩行動』を出していた詩
の仲間社から『土塊』(上村実)、『福永剛遺稿集』、『廃園の血脈』(定村比呂志)が出された。

このうち『古き世界の上に』と『福永剛遺稿集』以外のものは発売を禁止された。

大杉幸吉は、昭和八年に出たその詩集の後記で「私は貧農の児の、誰もが通る行路をたどった。——内に蟠るこの苦悩を吐瀉し書き連ねたものは苦悩にうごめく農民の声であった。土中に突き立てられた思想の鍬は更に明日への黎明を求めて磨かれていった。瘦土に燃ゆるものは農民の肉片の炎である。」と語っている。しかし彼のその後の動静は、戦時中岐阜県の山中で炭焼きを業としていたと伝えられるばかりで、消息が絶え、戦中戦後の活動を今は尋ねることも出来ないままである。あるいは戦争のための死ということも考えられてよい。わずかに、いまは詩集巻頭の土屋公平の「紹介の詞」によって、雑誌『農民』系の詩人だったことが知られるだけである。

「農民の苦悶、更にそこから生れ出る新しい精神が、じんと浸み渡るような愛の暖かさによって描かれた詩」（土屋公平）といわれたことからすれば、そのころ多かった反資本主義、反マルクス、反都会の詩人だったようであり、そのことからすれば、農本主義的で、戦争とともに好戦と愛国の詩人に急転回した多くの農本主義的詩人の一人であったかというような想像もされやすいが、しかし、大杉幸吉の詩自体にはそのような傾向はあまり激しくはなかった。土着的生活的というよりも、むしろ観念的でプロレタリア詩のような戦闘的な性格を見せている作品も多く見られた。

俺達の糞屋は

すすけた頬に原始からの苦悩を刻んでつぶしている

その前で、耕地は

痩せこけた腹をひろげている

ここで抑圧にあえぎながら

蚯蚓のような土耕の生活にうごめき

永い因襲と強権のきずなに

からまれて悶え

俺達あ土塊の肌空腹をかかえて

駢け廻る

(歴史を割る)

この時期の農民詩人たちにはほぼ二つの型があった。農村と都市の対立を主張する農本主義傾向の詩人群と、プロレタリアとの階級的共同戦線を考える農村詩人たち、前者はアナキズム

系と自認することが多く、後者はナップ系とでもいうべきだが、大杉幸吉の詩の情感はかえって後者に近い。そして、アナキズム系の主流も亦、この後者の意識に傾く人びとの上にあったことはその時から戦争期の変遷までを通して明らかとなった。彼には「都会の戦慄」「都会の夕暮」「都会の夜から」「都会の十字路に立ちて」「都会の空よ、雲よ」など、一連の都会をかいた詩があり、そこでは彼も

都会は奪取した俺達の生産物を貪り 肥満した肢体をくねらせて 更に農土を褥に伸びよ
ひろがる (都会の戦慄)

などと、農村を都会との対立の面でとらえているのは、貧農的感情のいつわらぬもう一つのものである。それでいて、都市と都市居住者をやみくもに憎むような農民の劣等感に陥没してしまっていないのは、大杉幸吉が働く者の怒りのはげしさを、より重要なテーマとしたためであろう。都会と農村との問題は困難な対立をはらんでおり、それをふかく正しく把握できた詩人は、戦前は、皆無に近かったように思われる。

定村比呂志『廢園の血脈』

定村比呂志は福岡県京都郡みやこの人である。彼は著書巻末の覚え書で

「都会商工資本主義社会は、必然的に崩壊するであろうが、その後に来るものは果してマルクス主義者の希求して居る如きプロレタリア的変革と転回を約束するであろうか？ 或はファシシヨ的な国家社会主義の勝利となるであろうか？ 否—右翼といふ左翼というも共にそれは、自己の政策的野望のために、農民階級を踏み台にせんとする強権支配欲のカイライにしか過ぎないのだ。」

と主張している。この血気さかんな意見のなかには、アナキズム的そしていくらか農本主義的な意欲がある。

『廢園の血脈』が編まれた一九三二年（昭和七）は、昭和の前史にシヨッキングなファシズムの狼火を挙げた五・一五事件の年である。その前年、全日本農民詩人連盟が結成され、定村比呂志はそこに属していた。それは農村自治連盟の系統をひく反ファシシヨ、反マルクス主義の全国的農民運動の組織であった。この詩集の序文が「地上樂園」の白鳥省吾、国井淳一と農民自治連盟系の鈴木勝、土屋公平等の手になることから、農村詩人定村比呂志の位置が、自治主義すなわち反資本主義をタテ糸とし、反ボルシェヴィズムをヨコ糸とする反都会的な、農本主義の傾度をつよくするアナキズムの主張の上にあったことは明らかである。

のちに全日本農民詩人連盟が分裂して、土屋、鈴木のほか、山下一夫などがアナキストの文学集団「解放文化連盟」に加わったのは昭和八年であった。

『廃園の血脈』が昭和九年に、その連盟系統の「詩の仲間社」から刊行されたあたりに、当時の農村詩人の一人として定村比呂志の位置が、ややはっきり見てとれる。大づかみにいって、反ファシズム、反ボルシェヴィズムの農村詩人の集団が、農本主義的なものと、よりアナキズム的なものとに分かれ、定村はその後者に属したのではなかったかということになる。後に解放文化連盟の有力メンバーとなった山下一夫が幹旋して「詩の仲間社」からこの詩集が出たこと、千葉県下の鈴木勝、土屋公平らも同連盟に加入した事実と併せて、定村比呂志もまた農村詩人としてもっともラジカルな立場をとった一人であったと思われる。

しかし『廃園の血脈』の作品は、当時アナキストの農村詩人の中で、注目された伊藤和の詩のような、リアリズムな農民詩とは少しへだたって、いわばその詩法は甚だプロレタリア詩的である。

風速十五メートル

午前四時の黎明は

つん裂かれた藁屋根の頂上に

死んだ秋刀魚の風貌をつき刺して

終日、終夜

血ぬられた生活の苦闘にきつ負える
五尺のわれをかって
草ぼうぼうの畑地へ追ふ
朝霧に横たわる黒い平原は一匹の野獣であり
風は豹のように林のなかを吠え廻る……

(血ぬられた生活記録)

巻頭の詩の最初の部分であるが、これはきわめてロマンティックで、やや観念的である。その作品が「世紀の牢獄」「牛魔王の首」「血飛沫の田園で……」「豊年の地獄」「廃園の血脈」「黒き奴隷の唄」などと名付けられたことにも、性急な反抗性がいちじるしい。しかもこの激しさの中で、地主への憎悪は顕著に吐露しながら、農村詩人にありがちな「都会への憎しみ」というものは、さほど表面に見えてはいない。

農村の詩人が反都会的な感情から農本主義に傾くのを止むなくした時期に同じくその傾向をもちながらも、定村比呂志がよりアナキズムに近づいたのは、友人関係もあつたろうが、彼にはもう一つ、階級的な思考が一本つよく通っていたからだ、と思う。

「日本歴史は、農民階級の直接搾取史だ」と言い、「詩は生活の血しぶきであらねばならぬ」と、重ねて主張したところに、詩集『廃園の血脈』は、昭和九年の時点で発禁になるべき運命

を担ったのであろう。

加藤吉治『野良着』

このガリ版詩集冒頭の言葉はまことにうつくしい。

「土まみれの馬鈴薯のごとき作品をのせて粗末な『野良着』を世におくる。まずしいが故に貧しいと書き、百姓生活の糧にもならない詩を書いては来たが、自分の作品が秀れているとは思わない。村人同志が話し合うごとく、野良着で銅羅声を張り上げて、叫びあうごとく書いて来たのにすぎない。」

これは、いわば生活派リアリズムとでもいうべきものである。この詩集をくりかえし読みながら、著者加藤吉治の、このほかの仕事や彼の仲間や、その全国的なひろがりのことがよくわからない。そのもどかしさにじりじりする。この詩集が出た昭和八年ごろは、その前からひろがりをもっていった犬田卯等の農民芸術連盟―農民自治文化連盟などのつながりをもっていたのではないか？ 何らかのかかわり方を、この『野良着』の詩風は思わせるのだが、静岡県の『農民小学校』や千葉県の『馬』や、土屋公平等の『戦野』のグループ、北九州の定村比呂志らの『鴉』、岡山の犬養智らの存在、反権威主義的で土着的、そして自主自治主義で非マルク

ス主義的なひろがりとして、昭和十年前の農民詩人たちとひろく連繫していたと見えるふしがある。すでにその実体は、はるかにつかみにくくなっているが、地域での注目から県の警察部など独自に禁止されることも多かった時代である。

加藤吉治の『野良着』も、そんな憂目に遭ったものと思われる。「吹雪の後」「吹雪」（その一、その二）などの詩が、部分的に削除されたガリ版ワラ判紙の粗末な五十頁ばかりの小詩集は、そのような戦前の弾圧に耐えたものの面影をのこしている。

跋をかき、ガリを切る役目を引受けたという仲間の加藤精宏はこうかいている。

「彼は百姓として変った毛色もしていない。まことにぶこつをさえ思わせるいい村人だ。しかしペンを持ち詩を書く所以はただ黙して働くことのみしか欲しない百姓仲間からの悪評や軽視をきくだろう。」

何かものを書く、かいて自分の思いを述べるといことが、百姓仲間から異色に見られる、というほど日本の、わけても東北の百姓は地主と土地の前にいじけていたのだ。

だからこそ『野良着』刊行には意義があり、その発禁は歴史の何かを背負いつつ、証言しつづけるのである。

ワ

ネ、ワタシハマズシイヒヤクシヨウノコヨ

ホントニヒヤクシヨウクライ

ツマラナイモノハナイワネ

オッホッホ……

タカイコヤシライレテアセミドロデトッタオコメガ

一ツブモナクナッテヨ

シロイオマンモノタベラレルノハ オボントオシヨウガツバカリヨネ (場末の女)

こんな稚拙で型のごときハナシが、ある実感をもって「詩」となり得た百姓の生活、そのよ
うな時代がたしかにあった。この詩集には直接反抗的な言葉はほとんど使われていない。事実
をいくらかセンチなとらえ方で書きつらねたものが多い、にもかかわらず注目されたというの
は詩が小作百姓の生活から生れたという、このリアリズムの故である。部分を削除したが、そ
れでも発禁処分にあったのは、みなそのためであった。

山形県南村山郡西郷村小穴の無肥料地帯社、ここには幾人かの仲間がいた。太平洋戦争と、
あのとときから四十年近くたった今日、そこに『野良着』の著者とその仲間の息吹はまったく生

きのこってはいないであろうか。

私はこの章に「農民の発禁詩集」という名をつけた。もう一度、すでに紹介した伊藤和の詩
集『泥』も亦ここに並ぶべきことを考えたからである。農民の詩で生活的リアルで戦闘的な性
格を加えて、ひろく強く影響をのこした伊藤の詩は、詩が生活の実践であるという思いで農村
の詩人たちに受けとられた。日本の詩史が殆んど彼らを忘れがちななかで、かえってその光茫
は未来に懸るであろう。